２０２2年度

愛知の外国語教育

（第51集）

も く じ

Ⅰ　はじめに ･･2

Ⅱ　本年度の研究活動

(1) 第72次教育研究愛知県集会でのとりくみ

研究内容

主体的に学習にとりくむ態度を育む指導のあり方

主体的・協働的に学び合い、英語で自分の考えや気持ちを伝えようとする子どもの育成

－小学校６年生外国語“Let’s go to Italy”の実践を通して－･･･････････････････3

コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む言語活動のあり方

自分の伝えたいことを即興で発信することができる生徒の育成

－リテリングを活用した英語指導を通して－････････････････････････････････5

思考力・判断力・表現力を育む言語活動のあり方

主体的に考えながら表現することのできる生徒の育成

－中間交流を位置づけた言語活動の工夫を通して－･･････････････････････････7

(2) 子どもたちの「生きる力」を育む教育課程編成へのとりくみ

自然な流れの中で英語でやり取りができる生徒の育成

－中学３年英語科「対話活動」の実践を通して－･････････････････････9

愛知教職員組合連合会　教育課程研究委員会外国語部会

２０２２ 年度　　教育課程研究委員

ブロック推せん　　　　　　　　　　　　　　　　　　　◎部長　○副部長

名古屋			尾　張			三　河		
名　　前	単 組	学校名	名　　前	単 組	学校名	名　　前	単 組	学校名
◎髙野賢一郎	名古屋	小幡小	稲垣　徹哉	小牧	桃陵中	楠崎　寛人	豊田	浄水中
○堀本　尚宏	名古屋	上社中	○加藤　直樹	稲沢	明治中	鈴木　啓仁	豊川	御津中

第68次～71第次教育研究集会全国集会リポート提出者

68 次			69 次			71 次		
名　　前	単組	学校名	名　　前	単組	学校名	名　　前	単組	学校名
浦田将夫	海部	蟹江北中	佐藤公哉	稲沢	大里東小	青木龍一	一宮	萩原中

第72次教育研究全国集会　リポート提出者　白澤　義顕（蒲郡・三谷中）

Ⅰ　はじめに

教育課程研究委員会外国語部会では、以下にあげる基本的な考えのもと、第72次教育研究活動の重点である「学びの質をより追究するとともに、子どもたち一人ひとりの意欲を大切にし、学ぶ喜び・わかる楽しさを保障する教育課程編成活動」「学校・地域の特色をいかし、家庭や地域社会と協働をはかりながら、人・自然・文化などとのかかわりを大切にした創意あふれる教育課程編成活動」をふまえて研究をすすめている。

【基本的な考え】

- 各学校や地域の特性を生かし、子どもたちにとってわかりやすく楽しい学びを実現するための手だてを工夫する。
- 扱う言語材料は、「聞くこと」「話すこと（やり取り・発表）」「読むこと」「書くこと」におけるコミュニケーション能力の総合的な育成をめざし、実際の目的、場面、状況を意識した言語活動を通して学べるようにする。
- 小学校外国語の教科化により、いっそう小中学校の連携を推進する。また、他教科との連携を学校ぐるみで検討し、年間計画にもとづく指導を展開していく。

さて、第72次教育研究集会にむけて、19本のリポートが提出された。子どもたちが楽しみながら英語を学び、積極的に自己表現できる力の育成をめざしたものが中心であった。本次県集会では、以下の三つの討論の柱ごとに、小グループによるリポート発表と討論が行われた。その後、各グループからの問題提起をもとに、全体で討論と意見共有が行われた。

1　主体的に学習にとりくむ態度を育む指導のあり方
2　コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む言語活動のあり方
3　思考力・判断力・表現力を育む言語活動のあり方

以下に、教育課程研究委員会で検討された興味ある実践報告と、教育課程研究委員の行った実践報告を紹介する。快くご了解いただき、リポートの再編を行っていただいたことに、この紙面をお借りして改めて感謝の意を表したい。

来年度への課題については、以下の２点があげられる。

・学年間や小中学校の効果的な接続を意識した指導方法のあり方
・子どもたちが主体的に学び、かかわり合う言語活動のあり方

本次県集会の成果と教育課程研究委員会外国語部会の研究内容をふまえ、今後も継続的な研究実践をすすめていきたい。

Ⅱ　本年度の研究活動

（１）第72次教育研究愛知県集会でのとりくみ

主体的に学習にとりくむ態度を育む指導のあり方

主体的・協働的にチームで学び合い
英語で自分の考えや気持ちを伝えようとする子どもの育成

―小学校６年生外国語”Let’s go to Italy”の実践を通して―

岡崎市立常磐小学校　丸中　美来

１　はじめに

本校の６年生は、昨年度に台湾の児童との協働学習で、英語で自分の考えを伝えたり、相手の考えを聞いたりした経験があり、外国に関心をもつ児童が多い。児童に「６年生の英語で何ができるようになりたいか」と問うと、「外国人と英語でいろいろなことを喋りたい」や「楽しく英語で会話ができるようになりたい」と英語がもっと話せるようになりたいという思いが伝わってきた。そこで、本単元では、既習表現を活用し、ＡＬＴのジョナさんに行ってほしいおすすめの国を紹介するトラベルガイドになりきり、自信をもって相手に自分の考えや思いを伝えられるようにしていきたい。そして、「ジョナさんに英語で自分の考えや思いを伝えることができた」と達成感を得ることができ、今後の学習に弾みをつけられるようにしたい。

２　研究のねらい

①紹介する国とその理由を表す英語表現を理解し、ＡＬＴに考えや気持ちなどを伝えることができる。

②ＡＬＴに考えや気持ちを伝えるために、伝え方を４人１組の各チームで工夫することができる。

③外国語の背景にある文化に対する理解を深めることができる。

３　研究の仮説と手だて

＜仮説＞

ＡＬＴに行ってほしいおすすめの国を紹介する場面を設定し、この学びと協働的な学びを両面から充実させることで、児童は、英語で自分の考えや気持ちを相手に伝えるために、紹介する内容や伝え方を工夫するだろう。さらに、紹介後に、ＡＬＴに行ってみたい国を選んでもらう展開を児童と共有することで、児童はより意欲的に学習にとりくむだろう。

＜手だて＞

①明確な目的、場面、状況の設定・・「ＡＬＴに国紹介をする」
　　「チームごとの目標設定」

②チーム学習の活用・・・・・・・・・「話し合い」「他チームとの見せ合い」

③英語のインプットの工夫・・・・・「デモンストレーション」
　　「Key Sentenceに関わる気づきのある会話」

④振り返りシートの活用・・・・・・「個別の目標設定」
　　「チャートを使った自己評価と記述式の感想」

４　研究の実態と検証

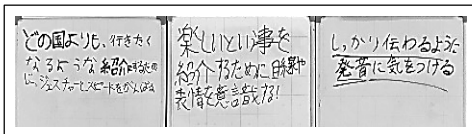
＜手だて①　明確な目的、場面、状況の設定＞

「ＡＬＴに行ってほしい国をチームで魅力的に紹介しよう」と目標設定したことで、資料１の会話にあるように、児童に切実感や他者意識が生まれ、最後まで集中してとりくめることができた。「ＡＬＴにまず初めに行ってみたい国を選んでもらう」という場を設定したことで、魅力を伝えたい、選ばれたいと意欲が高まり、伝えることの精選や発表の工夫につながった。さらに、資料２のチームごとの目標を決めたことで、

資料1＜授業記録＞

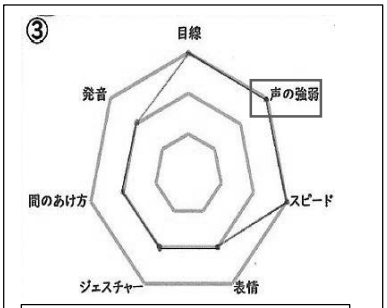
S①：ジョナさんは、フラワーアレンジメントが好きって言ってたから、自然豊かな国もいいね。

S②：お土産も買いたいし、日本だと絶対食べれないものも食べたいと思う。



資料２＜チームの目標＞

７つある発表の工夫から重点的にとりくむものが決まり、漠然と練習するのではなく、一人ひとりがその目標を意識して練習することにもつながった。他チームの発表を見てアドバイスする際にも、そのチームの目標に沿った称賛やアドバイスができたことも、手だて①が有効であるとわかる。



他の人から言われた声の大きさにも気をつけたい。

資料３＜自己評価と感想＞

＜手だて②　チーム学習の活用＞

チームでＡＬＴに行ってほしい国を考え、伝え方を工夫する活動をしたことで、英語が得意、不得意関係なく積極的にとりくむことができた。他チームと見せ合いでアドバイスを伝え合う場で、友だちから褒められ自信につながった児童もいた。資料３の感想にあるように、他チームからアドバイスをもらい、自分だけの課題にするだけでなく、それをチームに伝えて、「声の強弱」ができるようにしたことからも、手だて②は有効であった。

＜手だて③　英語のインプットの工夫＞

ＡＬＴとKey Sentenceを使ったやり取りや、歌やチャンツを繰り返し練習したことで、児童は、そのKey Sentenceの音に慣れ親しむことができ、その後の活動に生かすことができた。また、ＡＬＴの国紹介のデモンストレーションを見たことで、資料４のように発表の仕方の工夫のポイントを児童が見つけることができ、発表練習の視点につながった。しかし、資料３の記述で声の強弱に対するとらえにずれがあるとわかり、再度デモンストレーションを行った。資料５の児童の変容から、ポイントとなるもののイメージをもてるように行った、Key Sentenceを使ったやり取りやデモンストレーションの手だて③は有効だった。

資料４＜発表の工夫＞
・目線
・声の強弱
・スピード・表情
・ジェスチャー
・間のあけ方・発音

目線や声の強弱が上手にできた。来週も、Level Upして完ぺきにできるようにがんばりたい。

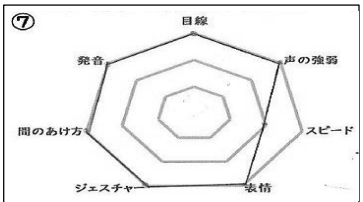
資料５＜感想＞

＜手だて④　振り返りシートの活用＞

振り返りシートの７つの発表の仕方の工夫の自己評価をチャートにすることで、安定してできているところ、不安定なところ、なかなかうまくできないところが、可視化できる。そのため、児童が自己分析できるだけでなく、教員やＡＬＴも児童の困り感に的確なアドバイスができた。資料３ように、自己評価チャートと記述式の感想から「声の強弱」のとらえの違いに気付き、早めの軌道修正につながった。記述のみの振り返りだけでなく、チャートを使用したことで記入する時間の短縮もでき、活動時間の確保にもなった。チャートを使った自己評価と記述式の感想により、児童自身が自己の成長の気付きや次回がんばりたいことの見通しをもつことでき、手だて④は有効であったと言える。

５　おわりに

本単元の児童の姿は、資料６からもわかるように活動の見通しをもち、「ＡＬＴに自分の国を選んでもらいたい」という願いをもってとりくむことができた。今後の外国語の学習では、未知の状況にも対応できるよう、未習表現であっても、会話の流れからおおよその内容を理解して、反応したり、自分の考えを即興的に伝えたりできるような言語活動を取り入れていく。本研究での資料４の発表の仕方の工夫については、外国語の学習だけでなく、他の教科・領域にもつながるところがある。一つの学びから他の教科・領域へ波及させていくことを通して、担任として日々の研究に真摯にとりくんでいきたい。



表情やジェスチャーもたくさんつけることができたし、自分達も楽しみながら発表できてよ

資料６＜自己評価と感想＞

コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む言語活動のあり方

自分の伝えたいことを即興で発信することができる生徒の育成
～リテリングを活用した英語指導を通して～

名古屋市立丸の内中学校　佐藤 慎太朗

１　研究のねらい

研究の対象となる生徒は、あらかじめ原稿を準備して発表するスピーチのような活動に対して、会話のやり取りをするような即興性が求められる活動では、比較的平易な英語表現ばかりを使っていることに気付いた。アンケートを実施すると、即興性が求められる活動を苦手に感じている実情が見えた。円滑なコミュニケーションを成立させるためには、伝えたいことをその場で考え、即興で発信する力が必要になる。先に述べた生徒の実態から、わたくしは、既習表現を用いて、自分の伝えたいことを即興で発信することができる生徒を育成したいと考えた。そこで、教科書本文の内容を自分の言葉で相手に伝えるリテリングにとりくみ、「即興で発信する力」を身につけさせることをめざした。

２　研究の方法

(1) 対象生徒　３年生　２２人

(2) 研究の手だて

【実践１】Road to Reading Master（４月中旬～）

【概要】

さまざまな方法を用いた教科書の音読練習によって、既習の英語表現が、口をついて出てくるようになることをめざす。

【実践２】Road to Retelling Master（５月下旬～）

【概要】

教科書本文のリテリング活動を通して、既習の英語表現を即興で活用できるようになることをめざす。

【実践３】Telling about Japanese Culture（７月中旬）

【概要】

「ＡＥＴが、さまざまな日本の文化について知りたがっている」という設定で、既習表現を駆使しながら、ＡＥＴに即興で日本文化について伝えることをめざ

既習の英語表現を定着させる活動

既習の英語表現を即興で活用する活動

伝えたいことを即興で発信することができる生徒の育成

３　実践の内容

【実践１】Road to Reading Master（４月中旬～）

(1) ねらい

既習の英語表現が、口をついて出てくるようになることをめざす。

(2) 実践の方法

① 全体での音読指導のあと、教科書の本文の穴あき音読プリントを用いて、繰り返し音読練習を行う。その際、穴あき音読プリントを数種類用意し、生徒一人ひとりが自分の学習段階に応じた練習にとりくめるようにする。

② 左側に教科書の本文、右側にその日本語訳が書かれたプリントを用いて、ペアに言われた日本語を反射的に英語に直して言うトレーニングを行う。

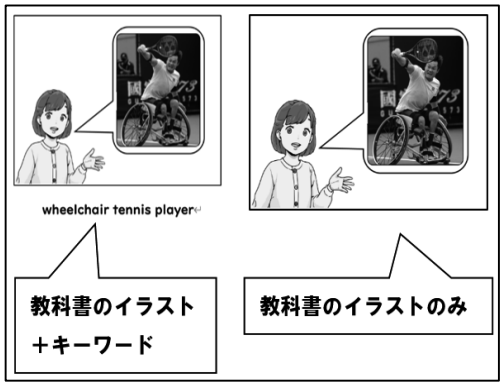
【実践２】Road to Retelling Master（５月下旬～）

(1) ねらい

既習の英語表現を用いて、教科書本文の内容を即興で相手に伝えることをめざす。

(2) 実践の方法

【図１：実際に使用したプリント】



① 教科書のピクチャーカードや、本文内容のキーワードが書かれたプリントを用いて、教科書内容をリテリング（自分の言葉で説明すること）する。

② ペアで互いのリテリングを発表し合い、相手のリテリングを聞くことで、自分が使える表現を増やす。また、毎授業ペアを入れ替えることで、より多くの相手のリテリングを聞く機会を設定する。

③ リテリングの手がかりとなるプリント（図１）を数種類用意し、生徒が個々の学習段階に応じてその中から使用するヒントを選び、練習を重ねる。

【実践３】Telling about Japanese Culture（７月中旬）

(1) ねらい

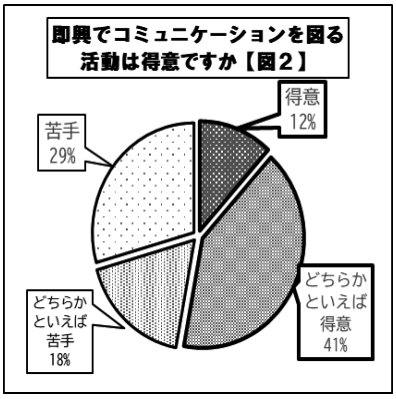
「ＡＥＴが、さまざまな日本の文化について知りたがっている」という設定で、既習表現を駆使しながら、ＡＥＴに即興で日本文化について伝えることをめざす。

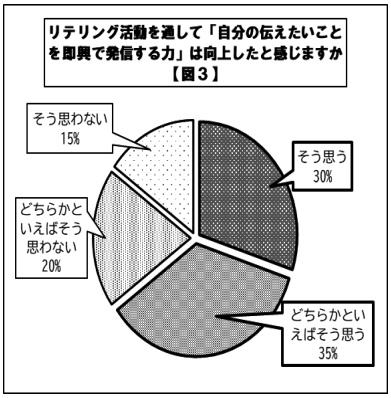
(2) 実践の方法

① 指定された日本文化について、説明するために必要なキーワードを学習プリントに書き出す。

② 生徒は、その場でＡＥＴに指定された日本文化について１分間即興で説明する。

４ 成果と課題





実践３終了後、４月に実施したものと同様のアンケートを再度実施した。その結果を見ると、今回の実践でとりくんだ「学習した英語表現の定着をめざす活動」と、「定着させた英語表現を、実際に即興で活用する活動」が、生徒の「できた！」という達成感を生んだと考える。特に、定着させた英語表現を即興で活用する練習であるリテリングを実践に取り入れたことにより、即興でコミュニケーションを図る活動への苦手意識が克服されて、生徒の「自分の伝えたいことを即興で発信する力」は向上したと言える（図２、３）。

一方で、実践３の様子をより細かく分析すると、多くの生徒が１、２年生で学習した平易な英語表現を中心に活動にとりくんでいるという課題も見えた。より円滑に自分の伝えたいことを発信するためには、３年生で学習する言語材料も、積極的に自分の表現に取り入れていく必要があると考える。

今回の実践から、リテリング活動が生徒の「自分の伝えたいことを即興で発信する力」の向上に効果的であることがわかった。今後も同様の活動を継続的に行い、生徒が即興で活用できる英語表現の幅を広げることをめざしたい。

思考力・判断力・表現力を育む言語活動のあり方

主体的に考えながら表現することのできる生徒の育成
―中間交流を位置付けた言語活動の工夫を通して－

稲沢市立治郎丸中学校　三上佳彦

１　はじめに

本校の生徒の課題として、「事前に準備したものを英語で発表することは比較的できるものの、即興的に考えながら英語で表現することには弱さがあること」「言語活動における学びがその後の学習活動に十分に生かされていないこと」があげられる。そこで、本年度は、コミュニケーションの目的・場面・状況に合わせながら、考えながら表現することができる生徒を育成することをめざして実践を行った。具体的には、「中間交流を位置付けた言語活動」「バックワードデザインによる単元構想」「目的・場面・状況を明確にした言語活動」「意図的・計画的な対話方略（対話を続けるための基本的な表現）の指導」に焦点を当てて、生徒の「考えながら表現する力」を高めることをめざして研究実践をすすめた。

２　研究構想

⑴　めざす生徒像

◎　主体的に英語を使ってよりよいコミュニケーションを求め続ける姿。
◎　自分の思いや考え、伝えたい内容について適切な英語表現を駆使して、考えながら表現する姿。

⑵　研究の手だて

手だてⅠ	「Small Talk・単元終末活動への中間交流の導入」
手だてⅡ	「バックワードデザインによる単元構想の工夫」

①　手だてⅠ　Small Talk・単元終末活動への中間交流の導入

【資料１】のように、対話活動の間に中間交流を位置付ける。中間交流では、教員が生徒の発話を拾い上げ、その表現のよさを全体に広めたり、うまく言えないことや困っていることを共有して解決したりすることで、後半の活動にいかすことができるようにする。また、タブレットPCを活用するなど、自らのパフォーマンスを見直す機会を設けることで、より充実したコミュニケーションを図れるようになることをめざす。中間交流の形態としては、「個人型」「２人型」「グループ型」「全体交流型」の４つの型をその場に応じて取り入れる。

【資料 1】中間交流を位置付けた指導モデル

① 教員同士（教員と生徒）によるデモンストレーションなど
↓
② 生徒同士の対話活動（１回目）
↓
③ 中間交流
↓
④ 生徒同士の対話活動（２回目）

②　手だてⅡ　バックワードデザインによる単元構想の工夫

単元構想を行う際には、まず単元終末時の生徒のめざす姿を明確にする。次に、その姿を具現化するために、目的・場面・状況を明確にした単元終末活動を設定する。そして、１単位時間ごとの目標や活動内容、Small Talkの学習内容を設定し、単元を構想する。単元構想の際には、Small Talkと１単位時間の学習内容が、単元終末活動につながるように留意する。これらを明確に示した単元構想図【資料２】を各単元で作成し、指導する。また、毎時間のSmall Talkで指導する対話方略を明確にし、単元構想図に明記するようにする。

【資料 2】単元構想図

【単元を貫く課題】外国人観光客に，稲沢市のおすすめのレストランを紹介しよう！

【単元終末時に目指す生徒の姿】
◎　おすすめのレストランの魅力を外国人に伝えるために，具体的なメニューを取り上げて紹介したり，相手を惹きつける質問や問いかけをしたりしながら，説明している。
◎　おすすめのレストランの魅力について，情報を整理して分かりやすく書きまとめている。

【コミュニケーションの目的・場面・状況】
あなたは，外国人観光客に稲沢市のおすすめのレストランを尋ねられました。外国人観光客の好みや今食べたいものなどのニーズを聞き，それに合ったレストランの魅力を紹介しましょう。

第1・2時	Small Talk ❶ Let's talk about your favorite food. ♦対話方略【話題を深める】 What ~ do you like?	単元の見通しをもとう。 ジョシュのスピーチの内容を読み取ろう。	Activity ① 接続詞 when ○ 教師によるおすすめのレストラン紹介を聞く。 ○ 時間があるときに何をするかを伝え合う。 ○ 読み取りの視点に沿ってスピーチの内容を読み取る。読み取った内容をリテリングする。
第3・4時	Small Talk ❷ When you're free, what do you do? ♦対話方略【話題を深める】 Can you~? / Do you ~?	ジョシュと朝美の対話の内容を読み取ろう。 週末の予定を伝え合おう。	Activity ② 接続詞 if ○ 読み取りの視点に沿って対話の内容を読み取る。読み取った内容をリテリングする。 ○ 今週末が晴れの場合と雨の場合に何をするかを伝え合う。
第5・6時	Small Talk ❸ If you can use a Doraemon's tool, what tool do you want to use? ♦対話方略【話題を深める】 Why? / Tell me more.	カレーの歴史について読み取ろう。 自分の考えを伝え合おう。	Activity ③ 接続詞 that ○ 読み取りの視点に沿ってカレーの歴史について読み取る。読み取った内容をリテリングする。 ○ 様々な考えについて，「そう思うか」「そう思わないか」を伝え合う。
第7・8時	Small Talk ❹ Do you think that~? ♦対話方略【感想を伝える】 I see. / I think so, too.	世界の食文化について読み取ろう。 お気に入りのレストランとその理由を伝え合おう。	Activity ④ 接続詞 because ○ 読み取りの視点に沿って，世界の食文化について読み取る。読み取った内容をリテリングする。 ○ お気に入りのレストランとその理由を伝え合う。
第9・11時	Small Talk ❺ Why do you like~? ♦対話方略【感想を伝える】 Me, too. / I understand.	おすすめのレストラン紹介マップをつくろう。 おすすめのレストランを紹介しよう。	Activity ⑤ 単元終末活動 ○ おすすめのレストラン紹介マップを作成する。 ○ おすすめのレストランについて伝え合う。 → 《パフォーマンステスト》

【単元終末で目指す対話】
Hello. What do you want to eat? (I want to eat sushi. I like raw fish.) Oh! ❶ Me, too. ②If you want to eat sushi, I'll tell you a nice sushi restaurant. (Thank you.) ❷ Do you know Sushiro? Sushiro is near the station. ④ I like Sushiro because it has many kinds of sushi. My favorite sushi is tuna. ❸ Do you like tuna? ③ I think that Sushiro is the best sushi restaurant in our city.

３　研究の実際

⑴　手だてⅠ（Unit 7 単元終末活動）の実際

Unit 7では、「日本で活躍する外国人を紹介し、日本の伝統文化の魅力を世界に発信しよう！」という単元を貫く課題を設定した。単元終末活動を行うにあたって「落語」「茶道」「狂言」「着物」の４つの日本文化の中から自分が紹介したいものを選び、事前に調べ学習を行った。単元終末活動では、【資料３】のような過程で活動をすすめ、さまざまな形態で中間交流を取り入れた。⑤の中間交流では、「日本文化の魅力を伝えるために、どのような内容を紹介したいか」と問いかけ、意見を出させることで、発表内容を広げ、深めることができるようにした。⑦の中間交流では、まず、ペアで日本文化紹介を聞き合って、よかった点と改善点を伝え合った。その際には、授業の初めに示した振り返りの視点に沿ってアドバイスをするように指導した。また、タブレットPCで撮影した動画を見直すことで、自分のパフォーマンスを客観視できるようにした。そして、グループごとに「どのような内容を伝えると文化の魅力が伝わるか」と問いかけ、「伝えたい内容」と「使用する表現」を共有した。その後、再度生活班に戻って、最初に交流したペアで対話活動をすすめることで、表現力ののびを実感することができるようにした。

【資料 3】Unit 7 単元終末活動の指導過程

① モデルとなる教員のパフォーマンスを聞く。
② 話すときに大切にしたいポイントを教員とのインタラクションで明確にする。
③ あらかじめ作成したマッピングを参考にしながら，個人で練習する。
④ Ａペア（生活班）で日本文化紹介を行う。
⑤ **中間交流【全体交流型】**を行い，困ったことや疑問点を解決する。
⑥ Ａペア（エキスパートグループ）で日本文化紹介を行う。
⑦ **中間交流【２人型→グループ型】**を行い，振り返りの視点に沿って，アドバイスを出し合い，再構築する。
※ ⑥⑦をＢペア（エキスパートグループ）でも同様に行う。
⑧ Ａペア（生活班）で日本文化紹介を行う。
⑨ **中間交流【全体交流型】**を行い，仲間のよいパフォーマンスを見て，自分に生かす。
⑩ 本時の活動の振り返りを行う。

⑵　手だてⅡ（Unit 2 Food Travels around the World）の実際

Unit 2では、「外国人観光客に稲沢市のおすすめのレストランを紹介しよう！」という課題を設定して、活動をすすめた【資料２】。単元終末活動でめざす生徒の姿（パフォーマンス）を明確にした上で、身につけさせたい言語材料や活動内容を設定した。そうすることで、学習する必然性が生まれるとともに、無理なく言語材料を習得・活用することができるようにした。単元の第１時では、単元終末活動の教師によるデモンストレーションを見せることで、単元のゴールを明確化した。そして、より説得力のある紹介にするためには、接続詞を使って話すことが必要であることに気付かせ、本単元でさまざまな接続詞を学ぶことを確認した。毎時間のコミュニケーション活動では、新出言語材料である接続詞を十分に練習させるとともに、Small Talkにおいても繰り返し使用する場面を設定した。単元終末活動では、おすすめのレストラン紹介マップを生徒自身で事前に作成して、紹介を行った。その際、紹介したい内容（キーワード）をマッピングさせ、それをもとにその場で考えながら話すことができるようにした。

４　おわりに（成果と課題）

【成果】　Small Talkや単元終末活動において中間交流を導入したことで、自己の対話を見直し、再構築することができ、主体的にコミュニケーションを図ろうとする姿が増えた。また、 Small Talkや新出言語材料習得のための言語活動を、単元終末活動と関わらせた内容にすることで、単元終末活動において身につけた表現を場面に合わせて、主体的に選択しながら活用することができた。

【課題】　中間交流を通して、話題を深めたり広げたりすることはできていても、文法や語彙の誤りなど使用する英語の正確性に課題がある生徒がみられた。今後は、中間交流の中で、正確性を高めるための指導のあり方を検討していく必要がある。

(2) 子どもたちの「生きる力」を育む教育課程編成へのとりくみ

自然な流れの中で英語でやり取りができる生徒の育成
～中学３年 英語科「対話活動」の実践を通して～

豊川市立御津中学校　鈴木　啓仁

１　はじめに

本学級の生徒たちは、英語で伝え合おうとする生徒が比較的多い。しかし、相手が考えを伝えているにもかかわらず、会話が止まり、一方通行になっていることがある。決して、自然な流れの中でやり取りができているとは言えない状態である。そこで、授業の中で、対話を継続・発展させる方法の指導を行い、即興で伝え合う活動を取り入れれば、やり取りができる力を養うことができるのではないかと考え、本研究を実践することにした。

２　めざす生徒像

・対話が継続・発展する指導の工夫をすることで、やり取りの基礎を身につけ、続けられる生徒
・即興で伝え合う活動を通して、自然な流れの中でやり取りができる生徒

３　研究の手だて

①Ｑ＆Ａのシートの活用

疑問文と応答文が書かれたシートを使ってペアで反復練習し、基本的な表現の定着を図る。

②相づちのシートの活用

相づちの表現をまとめたシートを活用して、やり取りが続けられるようにする。

③生徒と生徒のSmall Talk（短時間で、１つの話題に対して小話をする活動のこと）

１分間生徒同士で即興で伝え合う活動を行わせ、やり取りできる力を養う。

④Small Talkの振り返りと継続的なフィードバック

生徒同士のSmall Talkの後に、必ず振り返る時間を設ける。

⑤生徒とＡＬＴのSmall Talk

ＡＬＴが決めた話題について、自然な流れの中でやりとりする体験を設定する。

４　研究の実践と考察

（１）Ｑ＆Ａシート

授業の初めの４分間に、帯活動としてQ&Aシートを使い、ペアで会話表現の指導を行った。（資料①）２分間、一方の人が質問をし続けて、時間が経過したら役割を交代して行った。基本的な答え方がわかってきたところで、次のQ&Aシートを配付し、新たな表現を習得していった。難易度は、中学１年の簡単なものから始めて、少しずつレベルを上げていった。

class(　　) No(　　) Name (　　)

Check	NO	Questions	Answers
	1	Are you in the baseball team?	Yes, I am. I like baseball. / No, I'm not. I'm in the brass band.
	2	Is this your bag? ※そのものを指さしながら	Yes, it is. / No, it's not. It's Mai's.
	3	Is he your teacher? ※人を指さしながら	Yes, he is. / No, he isn't. He's my classmate.
	4	Do you practice the piano?	Yes, I do. I like music. / No, I don't. But I practice the guitar every day.
	5	Do you have any pets?	Yes, I do. I have two dogs. / No, I don't. But I want a cat.
	6	How many rabbits do you have?	I have three rabbits. I like rabbits. / I don't have any rabbits. But I have a dog.
	7	Let's study English.	Yes, let's. / Sorry. I don't have time now.
	8	※絵を描くor実物の一部を見せながら、What's this?	Is it an eraser? / It's an eraser.
	9	Is English difficult for you?	Yes, it is. So I study it every day. / No, it's not. But math is difficult.
	10	Is Mr. Kawano cool?	Yes, he is. He is strong, too. / No, he isn't. But he is kind.

資料①【Q&Aシート】

（２）相づちシート

相づちシートを作成し、Q&Aシートと並行して活用することにした。（資料②）はじめは“I see.”や“Uh-huh.”ばかりだったが、１か月継続して行っていると、５種類以上に増えていった。

（３）生徒と生徒のSmall Talk

Small Talkで話したい話題についてのアンケートをとり、テーマを決めた。タイマーで２分間、即興で対話をし、実際にどのくらいの時間やり取りが続けられたのか確認できるようにした。生徒と生徒のSmall Talkは、全５回で指導の計画

やりとりマスターへの道

class(　　) No(　　) Name (　　)

自己評価（◎：よくできた　○：まあまあできた　△：あまりできなかった　×：まったくできなかった）

質問されて、考え中の時				Date									
Well.	Let me see.			相手の目を見る									
えーっと…	えーっと…			聞きたいセンテンスを言う									
				文以上で答える									
質問の答えが返ってきた時				相づち、つなぎ言葉									

聞いていることを相手に示す				許可、了解を示す		
Uh-huh.	Yeah.	Oh, do you?	Oh, are you?	That's all right.	Sure.	No problem.	Go ahead.
うん	そうだね	そうなの？	そうなの？	いいですよ	確かに	問題なし	どうぞ

喜びや感動を伝える				自分が理解している時		
Cool.	Great.	Sounds good.	That's nice.	OK.	Oh, I see.
かっこいい	すごい	よさそうだね	いいね	いいよ	なるほど

賛成、同意				驚きを伝える		
Me, too.	I think so, too.	Oh, yes.	That's right.	Really?	Wow!	I don't know that.
私も	私もそう思います	そうだね	そのとおり	本当？	わぁ！	知らなかったよ。

資料②【相づちシート】

を行った。１回目は、座席の隣同士でペアを組ませ、まず話題に対して日本語で１分間対話し、その後、英語で行った。２回目と３回目は、それぞれペアを代えて、前回と同じ質問で対話をすることにした。４回目は、１回目の相手と行った。１回目と比べて、どれくらいできるようになったのか、変容を感じさせるためである。５回目は、５つの質問の中から１つ選んで、対話をする活動を行った。５つの内容は、あらかじめ伝えてあり、クラスの代表者１人がどの質問にするのか選んでから始めた。

（４）継続的な振り返りとフィードバック

次の対話にむけて自ら課題を見つけていくために、振り返りシートを作成した。毎回Small Talk後に３分間時間を設けて、「相手の目を見て答えたか」「相手の質問に答えられたか」、「相づちやつなぎ言葉を用いたか」「関連する質問を付け加えられたか」を自己評価させた。また、「対話の内容のメモ」と「これを英語で言いたかった」の欄を書かせることで、次回のSmall Talkでどういった表現を生徒たちが使いたいと思っているのかを把握し、フィードバックを行うための資料にもなった。

対話シートは、Small Talkの内容を思い出し、文章を書き出していく活動である。（資料③）スペルがわからない部分があれば、カタカナで書かせた。この活動により、自分たちの対話で誤りがあったかどうか確認ができ、回収した後に、他のグループの対話の様子を共有する資料として活用した。

やりとりマスターへの道　対話シート

Class　No.　Name

A	If you have 10,000yen, what do you want to do?
B	I want to buy comic books. I like Haikyu.
A	Why do you like it?
B	Because I like volleyball. How about you?
A	I want to buy CDs. I like music.
B	Me, too. I like music too.
A	Oh, do you? Who is your favorite artist?
B	I like Aimyon. How about you?
A	I like Higedan. But I like Aimyon too.
B	I don't know that.
A	Have you ever been to live?
B	No. I haven't. I want to see her.

資料③【対話シート】

（５）生徒とALTのSmall Talk

生徒には、あらかじめ５つのうち１つ質問されることを伝え、その５つの質問を事前に伝えた。生徒にとっては、英語で自然なやり取りをする絶好の機会ということもあり、Small Talkに対する意欲を高める活動になっていたように感じる。だが、中には、緊張してしまい、頭が真っ白になってしまう生徒がいると考え、いつものSmall Talkのはじめのやり取りで始めるようにした。

５　研究の成果

Q&Aのシートを使った活動では、少しずつやり取りの回数が増えていった。継続的に同様の活動を行うことで、表現を使用する頻度が増え、言語習得につながったのではないかと考える。また、Q&Aは中学１年生の簡単な表現から始め、発展させながら指導をしてきた。簡単な質問だからこそ、質問に答えること以外について考える心の余裕が生まれ、本当の「やり取り」をしようとする意識が生まれたのではないかと考える。

相づちのシートを使った活動では、相手が答えたことに対して反応しようと、よく聞き、よく答えようとしていた。初めは、不自然な部分がありながらも、対話時の相づちの回数が増えていき、やり取りが続けられるようになった。

生徒と生徒のSmall Talkでは、同じ質問についてペアを代えて３回行うことで、最後まで対話を続けようとする意識が高くなった。ペアを代えると、例え同じ質問から始めても話の流れは変わってくる。また、流れを予想しながら話をすすめることができることから、難易度は適度に下がり、意欲は高く維持することができた。

Small Talkの振り返りと継続的なフィードバックでは、３種類のシートを使い分け、生徒が改善点を見つけ、改良を重ねていく、言わば実践的課題解決型の活動にすることで、自らの課題に気付くことができ、次時の活動に生かすことができた。

生徒とALTのSmall Talkでは、これまでの活動を生かして話をつなげようと意識が働き、自分の力を出し切る場となった。目標をもちながら、自然なやり取りができるようになってきたことが実感できているのではないか。また、ALTとフィードバックで言われたことで、新たな改善点が見つかり、より自然なやり取りができるようになる有効な手だてだったと考える。